

診療ガイドラインの過去、現在、未来

日時 4月23日(日)14時～17時

会員・無料

会場 兵庫県保険医協会会議室 (神戸フコク生命海岸通ビル5階)

講師 日本医療機能評価機構 Minds 診療ガイドライン作成支援専門部会委員

豊島 義博 先生

定員 120人 (事前申込順)

Evidence Based Medicine (EBM) という言葉は、1991年にゴードン・ガイアットが米国内科学会誌に投稿したコラムに初めて登場した。臨床疫学に加えてPC検索を追加し、EBMという言葉を用いた。ただ一つの論文だけで臨床判断ができることは、稀である。ゆえに、エビデンスを統合したシステマティックレビューや、診療ガイドラインが過去20年間では激増した。

当初、エビデンスの質は研究デザインで判定し、格付けしていた。この考え方は、日本の診療ガイドラインの作成基準となった「Mindsの診療ガイドライン作成の手引き2007」などに利用された。EBMの提唱者ガイアットを中心に、GRADE: Grading of Recommendations Assessment, Development and Evaluationという活動が2000年ごろより始まった。GRADEは、エビデンスの質を研究デザインだけでなく「アウトカム重視」で評価するように、検討した手法である。「研究デザイン中心の評価から、患者にとって重要な意味のあるアウトカムを重視した評価へ」というのがEBMのこの10年の変遷である。診療ガイドラインの作成方法の変化と、今後の展望を紹介したい。【豊島記】



参加申込書

4月23日 歯科定例研究会に参加します。

(返信 FAX:078-393-1802 TEL078-393-1809)

地区 (市区町) 医院名 ()

電話 () FAX ()

参加者氏名 ()